

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00317

研究課題名（和文）「帝国日本形成の物語」（西南・日清・日露各戦争の記憶）の成立に関する調査・研究

研究課題名（英文）The Research about building story of the Empire of Japan

研究代表者

樋口 大祐（Higuchi, Daisuke）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90324889

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：1870年代に流通した、幕末維新の歴史語りである『近世太平記』のほか、石牟礼道子、立原正秋、陳舜臣等、帝国日本において周縁的なアイデンティティ（女性、植民地出身、「混血」等）を有する1920年代生まれ（いわゆる戦中派世代）の作家たちの諸言説の分析を行った。

『近世太平記』論においては、帝国日本の始発期において前近代の歴史語りを持った影響の在り方について測定した。

また、後者の作家たちの言説研究においては、西南戦争・日清戦争・日露戦争に関する帝国日本の公的な歴史語りの在り方を踏まえ、それらとの差異、帝国の外部に通じる視点からの語り直しの可能性について探求した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1945年まで持続した帝国日本は、敗戦の結果消滅したが、その内的対象化と克服の知的作業は、その後すぐに始まった東西冷戦のために阻害され、現在まで完遂されていない。その結果、幾世代を経た現在の日本社会においても、国際情勢の変化の中で、帝国日本時代の心象地理が再生産される傾向が一部存続している。本研究は、かつて多くの帝国臣民の人生観や行動の選択肢に大きな影響力を發揮した「帝国日本形成の物語」を、個々の局面から描き直し、その影響力、「魅力」や功罪を検討することを通して、現在の社会において必要とされている、当該時期の歴史語りの在り方についての視座を獲得することに資するものである。

研究成果の概要（英文）：During the research period, I analyzed the historical narrative of Meiji Restoration written in the 1870s called as “Kinsei-Taiheiki,” and the discourses of writers born in the 1920s, including Michiko Ishimure, Masaaki Tachihara, and Shunshin Chen, who have marginal identities in The Empire of Japan.

In the paper of analyzing “Kinsei-Taiheiki”, I guessed the influence by pre-modern historical narratives to the starting period of the Empire of Japan. And, in the research of the discourses of the writers, I considered the potential of retelling of the history of the Empire of Japan from the another point of view that lead to the outside.

研究分野：日本文学

キーワード：記憶 物語 帝国 戦争 植民地 ジェンダー 鎮魂 Toxic masculinity

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は昭和戦前期の批評家・保田與重郎に対する関心から研究生生活を始め、大学院では保田が重視した日本中世の歴史文学を専攻し、台湾留学の経験を経て、日本の歴史文学を複数の可能性がせめぎ合う「転形期」の文学として考察する視点を開拓した。私見では、前近代日本の歴史叙述には、言語文化を共有する人々に対する感情移入の物語と、それらを共有しない人々に対する無関心の両側面が存在した。その傾向は近代の「帝国日本形成の物語」にも受け継がれ、戦前の満洲を巡る対立、現在の歴史認識を巡る隣接諸地域との対立の淵源をなしている。その意味でこの感情共同体の境界線をめぐる問題系は、今後の日本社会にも影響を持つ深刻なテーマであり、「帝国日本形成の物語」を正面から考察の対象に取り上げる必要性を痛感するに至った。

(2) 具体的な研究史を顧みると、西南戦争の記憶やその影響については、小川原正道『西南戦争』等があるが、文学研究側からの研究は少ない。日清戦争に関わる諸現象については、大谷正『日清戦争』、中塚明『蹇蹇録の世界』、井上勝生『明治日本の植民地支配』等のほか、個別作家の研究はあるが、戦争の集合的記憶を対象化した研究は少ない。日露戦争に関する研究は多く、文学研究側の成果には小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』がある。その他アジア主義関連の研究として竹内好、橋川文三、上村希美雄、中島岳志等の諸研究があるが、西南戦争・日清戦争・日露戦争の集合的記憶を分析する視角は薄い。以上が研究開始当初の研究史的背景である。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、1931の満洲事変を経て1945年の敗戦に至る帝国日本の歩みを大きく規制した、「満洲特殊権益論」「満洲生命線論」の基盤となった「帝国日本形成の物語」(西南戦争・日清戦争・日露戦争の集合的記憶を中核とする)の物語構造、成立・流布の過程を、その物語の枠組みからはみ出す人々の言説と対照させつつ明らかにすることを目的とする。満洲は、「帝国日本形成の物語」において、征韓論を唱えた西郷隆盛の西南戦争における敗北、日清戦争後の三国干渉による遼東還付という二度の挫折を経て、多くの将兵の犠牲の上に獲得した「聖なる土地」という意味を付与されており、昭和以降、その認識を修正できなかったことが帝国日本自身の崩壊を招き寄せたといえる。本研究では、西南戦争・日清戦争・日露戦争に関する集合的記憶の形成過程を分析し、「帝国日本形成の物語」が戦前の日本社会に対して持った意義、それを「学び捨てる」ための道筋について検討する。

(2) 1945年以降の戦後日本において、戦前の公的記憶であった「帝国形成の物語」は一たび封印された。しかし、戦後の価値観が空洞し、国際的安全保障環境の変化や憲法改正が論議され始めている現在、「帝国形成の物語」が想起される局面が増えてきている。しかし、「帝国形成の物語」は、根深いアジア蔑視観を無意識の前提としており、そのことが隣接諸地域との歴史認識の対立を激化させているように思われる。では、具体的にどのようなプロセスを経て「帝国日本形成の物語」は形成・受容されたのか、そこで選別・再生産され、また排除・忘却された出来事・記憶は何か。それを明らかにすることが本研究における学術的な「問い」の内実(目的)である。

3. 研究の方法

(1) 西郷隆盛の膨大な伝記類を含む、西南戦争に関する諸言説(黒龍会編『西南記伝』、石牟礼道子『西南役伝説』等)、日清戦争の戦記と英雄譚・挿話類(博文館『日清戦争実記』、従軍兵士・軍夫・記者等の日記・書簡類、陸奥宗光『蹇蹇録』、川崎紫山『日清戦史』、三木愛花編『日清太平記』、参謀本部編『明治廿七八年日清戦史』等)、日露戦争の戦記と英雄譚・挿話類(博文館『日露戦争実記』、桜井忠温『肉弾』、水野広徳『此一戦』、石光真清『曠野の花』、参謀本部編『明治卅七八年日露戦史』、海軍軍令部編『明治卅七八年海戦史』、後藤宙外編『明治太平記』、山中峯太郎『敵中横断三千里』等)等を対象に、「帝国日本形成の物語」としての諸特徴とその流布形態について検討する。

(2) それらの物語が民間史学・伝記、教科書・児童文学、大衆文学・大衆芸能、国文学・国史学・「満鮮史」学等において再生産されていく諸相とその変遷について検討する。同時に、宮崎滔天『三十三年の夢』、北一輝『支那革命外史』、植民地(台湾・朝鮮)出身知識人や日本留学経験のある中国文学者等の諸言説等(翻訳を含む)を対置し、「帝国日本形成の物語」の成立過程において生じる摩擦・葛藤、この物語を取り巻く複数の立場とその関係性について考察する。

4. 研究成果

2023年度末の時点における主な研究成果は以下の6点である。とはいえ、それらは当該科研費取得期間(2018年度~2023年度)中に入手した資料から得られた知見の一部であり、資料の解析に基づく論文執筆と研究成果の公表は今後も継続的に行っていく予定である。

(1)2018年度、「転生する『太平記』 - 吉村明道編『近世太平記』を中心に - 」を執筆し、小峯和明・倉本一宏編『説話の形成と周縁 中近世篇』(臨川書店、2019年)に掲載した。この論文は、幕末・維新期の日本史を対象として、1870年代に多数刊行された『近世太平記』ものの歴史文学ジャンルについて紹介し、その歴史語りの基本的枠組みが14世紀のいわゆる南北朝動乱を記述した『太平記』の発想を転生させたものである部分が多いこと、加えて、『太平記』の後半部と異なり『近世太平記』の後半部は1890年代以降に展開する日清戦争以降の変動を肯定的に予見する視線を有しており、後のアジア主義との差異と同時に、満州事変を支えた英霊言説に共通するナショナリズムを抱え込んでいることを論じた。幕末維新期の志士に対する『太平記』の精神的影響は、これまでも指摘されてきているが、帝国日本の始発期におけるその影響力の広がりや深度をはかる上で、本論文は一定の文学史的意義を有するものと考えられる。

なお、関連して、同年11月10日、東京の「歴史の文体」研究会において、兵藤裕己著『後醍醐天皇』の書評報告を行い、近代日本の自国史認識における後醍醐天皇の論じられ方とその変遷、問題点等について論じている。前近代における歴史的記憶が近代以降の歴史認識に与えた影響については、同年7月14日、関西軍記物語研究会にて発表した「平清盛の「記憶」と海港都市神戸」でも検討しており、近代の資本主義・帝国主義を推進する側の歴史的パースペクティブにおける平清盛の「記憶」の在り方について概観・検討した。

(2)2019年3月10日、神戸の青丘文庫研究会において、「立原正秋と「混血」言説 - 小説『夏の光』と1945年夏の軍港・横須賀の都市空間を中心に - 」と題する発表を行った(いずれ論文執筆・公表の予定)。自己演出に満ちた朝鮮ルーツの日本語作家として毀誉褒貶の多い小説家・立原正秋の、帝国日本への同化をめざした皇民化世代の状況を映し出した小説として、帝国日本の崩壊期である1945年夏の軍港・横須賀を舞台とする小説『夏の光』を取り上げ、その矛盾に満ちた言説を検証し、反響があった。立原正秋の問題系は、過去の植民地主義の負の遺産を持つ旧帝国日本の文学史的問題として、普遍性を有しており、その探求は今後の日韓関係のみならず、東アジアの中の日本の位置づけを考える上で示唆的である。

(3)2019年6月1日、大阪府泉佐野泉南医師会学術講演会「近代日本の医学と文学」を行い、日露戦争期の森鷗外の医学が政治に従属し、文学が政治の許容範囲に用心深く囲い込まれていたことに批判的に言及、さらに遠藤周作『海と毒薬』が、日中戦争・太平洋戦争時期における政治(軍事)と医学の関係性を可視化しようとしたさまを分析した。また、関連して、医師出身の後藤新平の台湾統治初期における衛生学言説と匪賊虐殺の関係についても探究したが、この点についてはまだ十分な知見には到達しておらず、発表は見送ったが、論文として執筆予定である。帝国日本における統治の学としての医学と日清・日露戦争の歴史語り、および文学の関係についてはまだまとまった研究がなく、問題の大きさ自体がまだ十分に認識されていない。今後の複数専門分野にわたる共同研究の可能性も含め、引き続き探求を続ける必要がある。

(4)当該科研費取得期間を通じて追及したテーマの一つが、陳舜臣を中心とする近代海港都市神戸において展開した文学史的展望の探求である。まず、2019年6月8日、第43回地中海学会で招待講演「Contact Zoneとしての海港都市 - 神戸の1940年代小説を中心に - 」を行い、近代の海港都市神戸を舞台に展開した近代の文学史に見られるコロナルな性格について紹介・分析した。続いて、2020年1月25日、AALA(アジア・アメリカ文学学会)1月例会で「海港都市神戸と移民文学の系譜」というタイトルで講演し、陳舜臣の小説『天球は翔ける』が、近代東アジア史を「移民」としての華人の視点から語りなおそうとする試みであることを論じた。

陳舜臣の1930~40年代神戸を舞台とする推理小説群は、日清戦争以来の帝国日本の歴史語りや優位を占める言説状況の中で、日中戦争下の適性外国人として理不尽な処遇を受けた在日華僑のトラウマ的な記憶を出発点としており、顕在的な現在から記憶を封印された過去に遡行する推理小説の手法とも相まって、帝国日本の歴史語りを相対化し、別の視座から語り直しうる契機を有している。この点については2024年2月17日の陳舜臣生誕100周年記念集会の報告集においても言及したが、いずれまとまった研究成果として公表する予定である。

(5)当該科研費取得期間を通じて継続的に探究したテーマが石牟礼道子の歴史語りに関する一連の研究である。

まず、2019年9月1日、日本文学・環境学会(ASLE-JAPN)の全国大会・石牟礼道子氏追悼シンポジウムにおいて、「石牟礼文学における非定住芸能民の「記憶」について - 『西南役伝説』を中心に - 」という発表を行い、少なくない反響を得た。2020年度は岡本達明『水俣病の民衆史』(日本評論社)、『石牟礼道子自伝』等の分析を通して、水俣市における日清日露戦争の

影響 と関連言説に関する分析を行い、『文学と環境』23号に「石牟礼道子における「貴種流離」の逆説について」を執筆し、日清・日露の戦争を経た1930年前後の水俣市において、天皇の日本窒素水俣工場への行幸に際して、権力がその道すじから精神異常者を排除しようとした様子と、それに対する家族の抵抗の形態、さらにそれを目撃した(当時幼女であった)作家・石牟礼の解釈の在り方を巡って考察を施した。

2021～22年度には、西南戦争に際会した環不知火海地域の民衆の生活史について書かれた『西南役伝説』についての論文を執筆・公表した(『石牟礼道子の〈古典〉を読む』収載)。西南戦争の記憶に関する物語化には、当時の官軍(明治政府)側の語りと、賊軍(西郷軍)側に同情的なアジア主義者・国権主義者の語り(たとえば黒龍会編『西南記伝』等)が存在するが、石牟礼道子の当該著作は、その二者のいずれにも属さない民衆的な語り照射することを目指したもので、特に「かんじん」と呼ばれた非定住民の存在を重視したことは特筆されるべき事柄であると思われる。また、目前の西南戦争の状況を説明するに際し、『平家物語』のヴァリエーションである警女唄の「一の谷」や、歌舞伎の「佐倉義民伝」ものが想起されるパターンが存在したことを確認した。

石牟礼道子の文学もまた、帝国日本の歴史語りを「辺境の民」やジェンダーの視点から語り直す契機に満ちており、2023年度以降の科研費基盤研究(C)「日中戦争・アジア太平洋戦争に関する女性視点のナラティブの諸相についての調査・研究」において継続・発展させる予定である。

(6)以上の個別テーマに基づく諸研究のほかに、2020年度末刊行の『百花繚乱 - ひょうごの多文化共生150年のあゆみ』の共同編集、2022年度末刊行の『人文学を解き放つ』の編集代表、および2024年度刊行の『光と風と夢 - 街角の記憶を歩く -』の共同執筆を行った。『光と風と夢』は、2021年4月以降、毎月一回、神戸新聞夕刊の文化欄に連載した「風景を読む まちかど文化遺産紀行」を補筆・改題したものである。そのなかで、姫路等の軍都や城崎等の温泉地、福原等の遊郭の位置づけを考察し、

また、大正期の「新しい女」、瀬戸内晴美、三枝和子、須賀敦子等のような昭和戦前期の女子学生等、帝国形成のストーリーに関わる女性視点の文学作品や諸言説の役割を連載時以上に重視する記述を増やした。この作業も科研費(基盤C)「日中戦争・アジア太平洋戦争に関する女性視点のナラティブの諸相についての調査・研究」でより一層の発展・深化を模索中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 樋口大祐	4. 巻 -
2. 論文標題 『平家物語』とポストコロナル批評	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 高木信編・本橋裕美編集協力『21世紀日本文学ガイドブック 平家物語』	6. 最初と最後の頁 110～129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口大祐	4. 巻 -
2. 論文標題 『西南役伝説』における民衆史的歴史語りの試みと非定住民の記憶	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 野田研一ほか編『石牟礼道子と〈古典〉の水脈』（文学通信）	6. 最初と最後の頁 212～235
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口大祐	4. 巻 未定
2. 論文標題 落城の物語と女性の語り・序論 - 『おあん物語』『おきく物語』を中心に -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口大祐	4. 巻 23号
2. 論文標題 石牟礼道子における「貴種流離」の逆説について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学と環境	6. 最初と最後の頁 50～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 転生する『平家物語』 - 危機の時代の想像力について -
3. 学会等名 『ポストコロナ時代の日本研究』（神戸大学 / 北京外国語大学国際会議）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 Contact Zoneとしての海港都市
3. 学会等名 地中海学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 「平成史」への欲望と移民
3. 学会等名 北京外大・神戸大（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 海港都市神戸と移民文学の系譜
3. 学会等名 AALA2020年1月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 平清盛の「記憶」と海港都市神戸
3. 学会等名 関西軍記物語研究会（於神戸市葺合市民センター）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 石牟礼文学における非定住芸能民の「記憶」について - 『西南役伝説』を中心に -
3. 学会等名 日本環境・文学学会（ASLE-JAPAN）全国大会（於和歌山大学南紀熊野サテライト）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 日本文学史における「境界線の政治 = ポリティクス」について
3. 学会等名 韓国人文学国際学術シンポジウム「知識権力の概念と研究方法」（於檀国大学）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 （合評会）兵藤裕己著『後醍醐天皇』（岩波書店）
3. 学会等名 「歴史の文体」研究会（於学習院大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口大祐
2. 発表標題 立原正秋と「混血」言説 - 小説『夏の光』と1945年夏の軍港・横須賀の都市空間を中心に -
3. 学会等名 青丘文庫研究会（於神戸市立中央図書館）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 樋口大祐（共同編集代表の1人）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 神戸大学出版会	5. 総ページ数 248
3. 書名 神戸大学人文学研究科編『人文学を解き放つ』	

1. 著者名 竹沢泰子・樋口大祐・兵庫県国際交流協会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 神戸新聞総合出版センター	5. 総ページ数 263
3. 書名 『百花繚乱 - ひょうごの多文化共生150年のあゆみ - 』	

1. 著者名 樋口大祐「転生する太平記-近世太平記を中心に-」	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 300
3. 書名 倉本一宏・小峯和明編『説話の形成と周縁 中近世篇』	

1. 著者名 樋口大祐	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 460
3. 書名 『東アジア文化講座』第3巻 / 小峯和明編 『東アジアの文学圏』	

1. 著者名 樋口大祐・加藤正文・三津山朋彦	4. 発行年 2024年
2. 出版社 神戸新聞総合出版センター	5. 総ページ数 239
3. 書名 『光と風と夢 - 街角の記憶を歩く - 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------